山梨日日新聞　2012年（平成24年）3月22日　木曜日

埼玉県所沢市の南林和さん(62)は大手ゼネコンを定年退職したのを機に、笛吹市でブドウ栽培を始め、農園も開園させた。現在は農地を借り受け、約40品種のブドウを栽培。商品は房で売るのではなく、いくつかの粒を袋に入れて販売するなど県内ではあまり例のない販売方法をとっている。第二の人生をブドウ栽培に懸ける南林さんの取り組みは、高齢化などで担い手不足が深刻化した峡東地域の果樹栽培に新たな息吹を吹き込もうとしている。

農閑期でも笛吹市を訪れ、剪定（せんてい）作業を行う南林和さん＝笛吹市一宮町東新居

ブドウを袋詰めして販売する笛吹農園

埼玉から通い笛吹でブドウ栽培

多品種「粒売り」新たな方式提案

南林さん　退職後、技術学び開園

峡東ワイド

2007年5月、「長男の就職に農業はどうか」と考えて、笛吹市を訪れたことがきっかけだった。学生時代に趣味である登山のためにたびたび来県していて、中央線から眺める峡東地域のブドウ畑に心を奪われた。

30年以上が経過し、当時の景観が維持されていないなどの荒れたブドウ畑に心を痛めた。長男は別の仕事に就いたが、南林さんは第二の人生を笛吹市でブドウ栽培することを決め、取り組みは始まった。

大手ゼネコンを定年退職するまでの2年間は月1回程度訪れ、地元農園の指導を受けながら技術を学んだ。退職後は農地を借り受け「笛吹農園」を開園。ただ、開園後も所沢市から近いことから週3～4回通うスタイルを実践している。

商品の販売方法も工夫。都内などのスーパーにはデラウエアか巨峰など数品種が並んでいる程度。しかも値段が高く一般家庭ではなかなか購入しにくい。そこで、房でなく粒を袋詰めし、少量ではあるが、より多くの品種を楽しんでもらうようにした。1袋200～350円ほどという。

少量販売は作り手である農家にもメリットがある。従来のブドウは一粒一粒を大きくするために摘粒し、大きな房を作る。しかし粒で販売するので、見栄えを気にせず結果として販売量は増える。また、少量販売は房より割高なので作り手にとっても収益は上がるという。南林さんは「コンビニと同じで少量販売は買い手にとって購入しやすい」と話す。

笛吹市を訪れ5年が経過しようとしている。最初に借りた農地は約2400平方㍍だったが、現在は約7500平方㍍までに広がった。南林さんは「山梨県の宝であるブドウ畑の景観を守るために、新たな農業スタイルを実践してモデルケースになりたい」と夢を膨らませている。